

全国農業

NATIONAL AGRICULTURAL NEWS

新聞

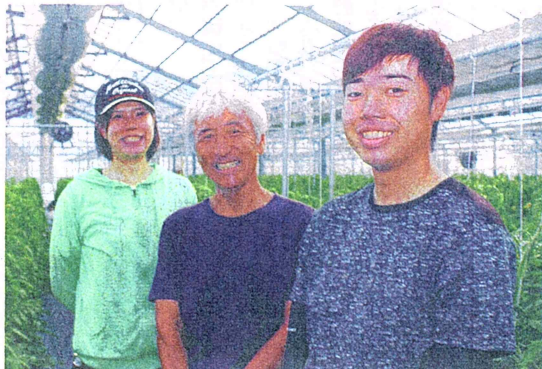
2018年(平成30年)

11月23日 金曜日
月4回金曜日発行

農業分野で活躍する大学発ベンチャー例

企業名	取り組み内容
(株)バイオコクーン研究所 (岩手大学)	カイコを原料とした健康食品を開発
メビオール(株) (早稲田大学)	医療用の膜を応用してアイメック農法を開発
(株)農の郷(島根大学)	高糖度のトマト生産
(株)KINP(高知大学)	植物由来のスズメバチ忌避剤を開発
(株)スティックスバイオテック (鹿児島大学)	家畜伝染病のウイルスを短時間で検出する検査技術を開発

静岡アグリビジネス研究所の皆さん
(中央が榎合さん)



静岡大学発 静岡アグリビジネス研究所

大学発 農業ベンチャーに注目

大学に潜在する研究成果を掘り起こし、新たな製品や新市場を創出する「イノベーションの担い手」として期待される、大学発ベンチャー企業。2002年に国が政策として取り組みだしたことをきっかけに、現在、2千社以上が起業をしている。バイオテクノロジー、ヘルスケア、医療機器などの分野が最も多いが、農業分野でも大学研究を踏まえた、新たな事業を展開するベンチャー企業が現れている。

研究踏まえ 新事業展開

トマトの収量4割増加 ビジネスモデルを確立

静岡大学発ベンチャー企業 静岡アグリビジネス研究所は09年に起業。同社は育苗ポット「Dトレイ」を使った養液栽培で、安定・継続性の高いトマト生産を構築。これをビジネスモデルにし、現場での栽培指導などコンサルティング業務、自社農場でのトマト生産・販売を展開している。Dトレイはオランダでイチゴ育苗用に開発された2500cc容量の連結極小ポット。1枚のトレイにポット10個が連結し、持ち運びも容易で、極小量培地での低段密植栽培が可能。また日射量に基づいて1株当たり約30cc、多い時で1日60回程度の培養液を自動で給液制御して、高い作業効率を実現している。

サポート受けて安心の生産

静岡県や愛知県で合計11店舗のスーパーを運営する㈱ヒバリヤ。「やっぱりヒバリヤ!!」というかけ声で地元から慕われている。同社は、地産地消を目指して、地元農家から直接農産物を買って入れているが、農業者の高齢化などで、品物の確保が難しくなっていた。そこで16年に自ら㈱日晴農場(裾野市農園)を設立。農福連携で障害者に就労の場を提供しつつ、改善を目指し静岡アグリビジネス研究所のビジネスモデルを17年に導入。通年でのトマト生産に取り組んでいる。

地方大学での 取り組み重要

大学発ベンチャーを推進する経産省大学連携推進室の稲畑航平室長補佐は「大学発ベンチャーは、ヒト・モノ・カネが集まる都市部に集中しているのが現状。眠っている研究成果を活性化し、地域経済を活性化するには地方大学の取り組みが重要」と話す。

をされていた。栽培方法は、榎合さんが大学で研究を重ねてきた生育データや、肥培管理の手法、Dトレイを組み合わせたことで確立する。

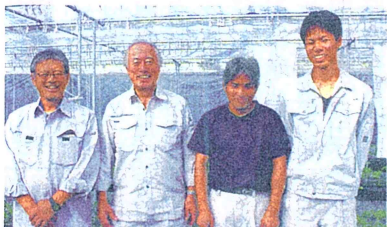
土耕栽培のトマトは通常10ヶ当たり15ヶ程度が収穫されるが、同社のビジネスモデルでは約4割増の25ヶ程度の収量となる。品質に関しては、糖度が高くゼリー状の少ない、酸味と旨みのバランスが良い果実となる。規格は需要の高いMサイズに生育する。榎合さんは「今は自身が研

究してきたことを、実践している状況です。作業の負担を減らし、もっかる農業を構築することで、農業の活性化につなげたい」と考えを話す。

同社では、栽培方法を普及させるため、現場で栽培技術を指導するコンサルティング業務も展開。メールや電話での相談から、週1回の圃場確認、現地での栽培指導など、個々の要望に応じて対応している。設備導入の際は同社農場での研修も可能。技術習得をサポートする。



Dトレイと大学での研究データを合わせ高い作業効率を実現



ビジネスモデルを導入した日晴農場

「地域農業への貢献や消費者への安定的な農産物供給のため、このビジネスモデルの導入を決めました。初期投資の費用は、温室の補修のため当初予算を超えましたが、長い目でみて事業を展開すべきだと考えています」と話す。

同農場では、17年9月からの導入以降、榎合さんからの定期的な指導も受けて、生産量を大きく伸ばしている。生